

No. 1179

# 夏休みの少年交流

177 中

夏休みを利用して北海道からやってきた少年少女の使節団。この使節団は、歯舞・色丹・国後・択捉の北方領土からの引揚げ島民の子供たち。少年交流は昭和46年から実施され今年で6回目。東京の中学生と自分たちの生活や学校の環境などについて自由に話し合いお互いの理解を深めていこうとするものです。総理府では植木総務長官に対し、「一日も早く北方領土の島々に帰れますようお願いします」と要望。これに対し植木総務長官は「君たちの要望にそうよう努力したい」と答えました。このあと記念撮影、使節団は交流交歓の役割を一生懸命果たしました。

## 8月15日

— 31回目の終戦記念日 —

347 中

昭和51年8月15日、31回目の終戦の朝を迎えた。

全国戦没者追悼式。天皇陛下のおことば「終戦以来、ここに31年、さきの大戦において、戦禍にたおれた、数多くの人々と、その遺族を思う時、今もなお、胸のいたむのを覚える。ここに全国民と共に世界の平和と我が国運の進展を祈り、心から追悼の意を表す」。

昭和20年8月原子爆弾の炸裂で長かった戦争は終わった。疲労困憊した人々はこの日をさかいに混乱の渦の中に投げだされたしかし、戦争の緊張から解かれ、年経るにつれて焼け跡に新しい生活を築いていった。昭和30年代に入ると生産の再開をめぐる流血の不幸事を起した、三井三池争議、日米安全保障条約の強行採決と政情不安にあけくれた。（それにもかかわらず）経済は池田内閣の所得倍増、高度成長政策のもとに急上昇を示した。この経済の拡大は農村をまき込み、いわゆる「3ちゃん農業」を生んだ、そして着実に大量消費時代に入っていった。人々は史上はじめて手に入れた物質生活を謳歌した。人々の頹廃と俗悪に抗議し、三島由紀夫が悲憤の自決をしたのは昭和45年の11月だった。

玉音放送。天皇陛下「—————」

日本列島総開発、総汚染、腐敗政治と汚職、目まぐるしい現代、街は戦争を忘れた。日本は終戦から遠いところにやってきただが、靖国の森には人々の新たな思いが甦り集ってくる。戦争に無念の涙で散っていった多くの人々、母は英霊を悼み、平和への誓いをただただ祈り続ける。大太平洋の激戦地のひとつ、ソロモン諸島から今だ帰えらぬ戦没者の遺骨収集に、4回目の収集団が出発した。31年もの長い間、嵐のように揺れ動いた、国土を、人々の心を、そして、伝統文化をこの終戦の日を機にもう一度考える必要がないとは言えない。